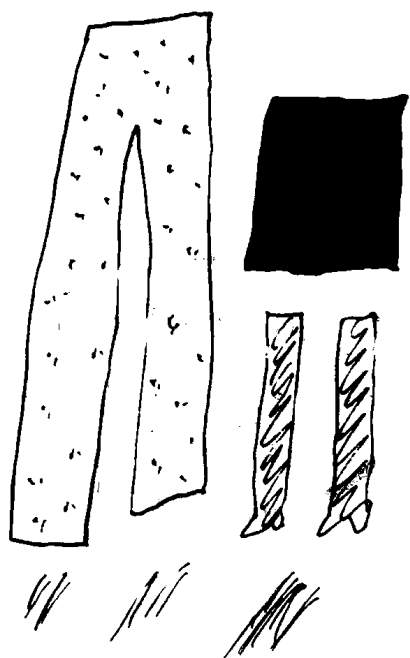


青い鳥を告発しろ

三浦朱門



講談社



青い鳥を告発しろ

© 三浦朱門 1971

昭和46年9月24日 第1刷発行

定価 580 円

著 者 三 浦 朱 門

発行者 野 間 省 一

発行所 株式 講 談 社
会 社

東京都文京区音羽2-12-21

郵便番号 112

電話 東京 (03)945-1111(大代表)

印刷所 豊 国 印 刷 株式会社

製本所 黒 柳 製 本 株式会社

PRINTED IN JAPAN

落丁本・乱丁本はおとりかえします

0093-125415-2253 (0) (文1)

青い鳥を告発しろ

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

鉄平夫婦、新婚旅行より帰ること

「お父ちゃん、キャンプよ。」

泰介は小学校一年の娘の正子がそう言うのを夢うつつに聞いた。

「おとうたん、キャンプよ。キャンプごっこよ。」

正子の弟の三歳になる純生すみおがそう言いながら布団の中に侵入してきた時は、子供たちがキャンプというのは、父親の掛布団をテントに見たてているのだなと思って、泰介は、

「よし、よし。」

ともう服を着かえた純生を夜着の下で抱きかかえて、中断された眠りを、あと五分でも十分でも楽しもうと思った。

「鉄平おじちゃんよ、キャンプよ。」

眠ろうとしている泰介の耳に、また正子の声がひびく。鉄平は泰介の弟だが、明倫大学の大学院ドクターコースに今年はいった。そして同級生の順子と一週間ばかり前に結婚式をあげ、式場からオンボロ車にテントと寝袋ふしどを積んでハネムーンに出発したのだ。キャンプの新婚旅行なんて

バカバカしい。昔のハネムーンは温泉地ときまっていたものだった。泰介と真理子の場合は紀州へ行った。丁度ミカンの色づく季節で、寢床の中で、真理子がむいてくれたミカンをたべた。

「兄さん、兄さん。」

鉄平の声だ。今度こそ、泰介ははっきり目をさました。

「アラ、マア、鉄平ちゃん。」

けたたましい真理子の声が聞こえる。しかし声の方角は玄関ではない。庭の方角だ。泰介が寢床から起き上って、窓のカーテンを開けると、そこに鉄平が立っており、その背後には「忽然」という感じでオレンジ色のテントが一張り、広いとは言えない庭にあって、その前でプロパンの火を使って飯をたいているのは、鉄平の妻になりたての順子にちがいなかった。

「ね、鉄平おじちゃんキャンプしてるでしょ。」

と正子がしたり顔に言うのと、順子が飯盒のむこうから、

「お早うございます。」

と頭をさげた。

「どうしたんだ、これは。」

「いや、昨夜、十時に都内に帰ってきたんだけど、一昨日にあくはずのアパートがまだ前の住人が出ていってないんだよ。それでさ、おやじのマンションに行っただけだけど、ベルがこわれて、起きてこないだろう。仕方がないからここへ来たんだ。十二時すぎてたし、起すのも悪いから、庭にテントはったのさ。」

「バカ、都内の宿屋、さかきくらげでもどこでも泊りゃいい。」

「金がないもん。東名高速で来たんだけど金が足らなそうだったから、沼津でおりたんだぜ。残金、百三十いくらさ。」

寝巻で押し問答しているうちに、泰介はブルツと身震いして、大きなくさめをした。

「兄さん、きたないなあ、くしゃみをする時は横向いてやるもんだよ。何だかニオイのする霧がとんできたぜ。」

鉄平が気味悪そうに、ハンケチで顔をふいた。

「あなた、そんなことしてると、風邪ひくじゃないの。」

真理子が寝室にはいつてきた。

「鉄平さんも順子さんも、話は後できくからおはいんなさいな。何もないけど、朝御飯くらい作るから。」

「それはもう、よろしいんです。無断でお庭を拝借したおわびに、あたしたちもう用意しますから。」

「米の御飯と京都の千枚漬となめこの味噌汁と、昨夜のではあるが浜名湖のうなぎの蒲焼きだぜ。小田原のカマボコもある。」

「カマボコ好き、カマボコ好き。」

と正子が踊り出すと、意味もわからないのに、純生もとび上る。

「おお、ジュンナマ、元気だな。」

鉄平が笑った。純生はスミオと読むのだが、鉄平はどうしても、彼をジュンナマとかビールとかしか呼ばないのだ。

「そう、じゃ、それいだけどうかしら。面倒がはぶけていいわ。」

真理子はあるさき、鉄平夫婦の申し入れを受けた。朝食というところ、いつもトースト、マーガリン、コーヒードから、鉄平の数えたてるメニューを聞いて、急にたべたくなつたに違いない。

泰介の一家に鉄平夫妻が加わつた朝食がすんでから、泰介がタバコを吸いながら言った。

「うん、日本風の朝飯というのも悪くないな。」

「ダメよ。うちはいそがしいんだから。こんな朝御飯作れないわ。鉄平さんたちだって、毎朝は御飯たけないでしょ。」

と真理子が予防線をはった。

「毎朝どころか。軽井沢じゃ、なあ、駅弁だよな。」

「でも、お茶わかしてあげたじゃない。」

「金沢じゃインスタント・ラーメン。」

「おい、お前たち、ずっと野宿してたのか。」

「ずっとでもないけど。式と披露が終つたのが二時半だろ。軽井沢は夕方だったけれど、ホテルは満員だといって泊めてくれないのさ。シーズン・オフだから大丈夫だと思つたんだけど。それでどこかの空別荘の庭にテント張つてから、レストランに飯をくいに行った。第一夜は野宿。」

「星がきれいだったわ。」

順子がうつとりした目をした。

「フーン。お前ら、どうしてウチの別荘を使わないのか、オレにはさっぱりわからない。」

泰介には新婚旅行に、ミノ虫の袋のような寝袋で別々に眠るという今時の若者の気持がわからなかった。

「つまり第二日が金沢。ここも宿屋がない、というより儉約したくなって、金沢大学の構内で野宿。第三、四、五日目は大阪のローヤルホテルに泊った。高かったなあ。五万円くらいとられた。芝居みたり、時計買ったり、順子の服を買ったりしてたら、アレヨという間に十万がとことんでっちまった。」

「買物なんかして使いこみの犯人みたいなことをするからだ。」

「それでさ、後は、奈良で二日泊って、石舞台なんかみて、それから、名神、東名で帰ってきたのさ。」

「あたしもお嫁に行きたいわ。お洋服、買ってもらえるんでしょ。」

正子が言うと、順子がウフフと笑って、さすがに赤い顔をした。鉄平もあわてて、

「バカ、よっぽどいいオムコさんを見つけないくちや、洋服なんか買ってくれないんだぞ。」と威張った。

正子と純生が庭のテントで遊びはじめると、泰介は改めて、鉄平夫婦にむかって、問い正した。

「今日は日曜で、銀行も休みだぞ。一体どうする気だ。う●だって明日になりゃ金は何とかなる

が、今日、お前たちのホテル代なんかの金はないぞ。それに、お前たちにしても、新婚早々、借金ではじめるのも、だらしない話だ。」

「いや、何とかあります。まず、残金でガソリンを二リットル買う。そして、当然、ぼくらに居住権があり、かつ権利金、間代を払いこんであるアパートをあげわたす交渉をします。」

「メシは。」

「大学食堂の食券がありますから、それでくいます。」

「もし、相手の男がアパートをあげなかったら。」

「いや、ダンコ追い出します。」

鉄平が TENT をたたもうとすると、正子に純生が泣きだした。

「いやだあ、TENT いる。TENT で遊びたい。」

「TENT、TENT だい。」

「兄さん、どうしよう。」

「どうしようだったって、庭の真中にそんな物おかれてたまるか。それに子供たちはきつと、そこでメシをくう、そこで眠ると言いだすんだから、たたんじまえ。」

子供の泣き声が一層高くなった。

「あのね、ここ日当りが悪くて寒いでしょう。おばちゃんがお縁側の前に張りなおしてあげる。」
順子が手早く、TENT を解体すると、縁側に運んできた。泰介は相手が鉄平ならやめろ、と言えるのだが、弟の嫁だと遠慮があつて、そんな所に TENT をはられたら、困るとも言えなかつ

た。

順子が杭を打ちながら、泰介に向って何か英語で言った。peg (杭) という単語やルーズ、テント、フォール (倒れる) という言葉が聞きとれたから、杭をゆるく打っておくから、テントはすぐこわれるから心配しなくともよいという意味だろうと思われた。

やがで鉄平夫婦は車で帰ってゆき、正子と純生はテントで遊んでいたが、

「ジン、ジン、大変だ。」

という子供の言葉に、泰介が新聞から目を上げてみると、順子の言った通り、テントは潰れてしまっていた。

善意も誓いも金がなくては幻想にすぎないということ

「おい、川島、困るよ。」

鉄平夫婦は、アパートで川島明の前にして交渉していた。川島の後ろに肩身がせまそうにして、若い女がいる。それが川島の恋人で信江という名前であることを、鉄平はたった今知ったのである。

「だからさ、さっき言ったように、おれは信江の見つけたアパートに引越すつもりだったのさ。

それなのに、引越しをはじめた夜、そのアパートが火事になって、信江は着のみ、着のままになってしまったのだ。おれは大学にはいった時は君らと同じでも、今度やっと大学四年生だから

な、おいそれと金はなし、困ってるんだよ。」

「おれたちだって、困ってる。残金、今や二十円くらいだぜ。」

「すまんとは思ふよ。しかし、鉄平も順子ちゃんも、東京に親の家があるんだし、いざとなれば、金くらい何とかしてくれる。しかしおれの家は四国だし、おやじはもう死んでるからなあ。」

「いいわよ。川島さん。あたし、うちへ行ってみる。」

「ウチって、君、どこのことだい。我々は結婚したんだぜ。」

「ごめんなさい。つまり実家よ。実家へ行つて、しばらく泊めてもらうわ。」

「しかし、ガソリンがもうないぜ。電車で行こうにも、電車賃がない。」

「二百円か三百円なら、おれ何とかできる。」

川島が元気づいた。

「信江が喫茶店に勤めてるだろ。今日は休んだけどさ、ドレスがないと働けないから、今日はこれから買いに行く所だ。」

鉄平は川島からもらつた四百円でガソリンを一リットル買い、順子の実家に車を向けた。鉄平がこれまで住んでいた両親のマンションはあるが、その窓のない小部屋には、川島の立ちのいた後に運び入れるはずの二人の家具がつまっていた、とても泊りこむゆとりはない。男のコケンにかかわると思ひながら、順子の実家を頼るより仕方がないのである。

しかし、ガソリンがどうやら怪しくなってきた。燃料計の針はゼロを示すEを通りすぎて、棒をはみ出しそうである。

「ちょ、ちょっと、ここでガソリン入れましょうよ。」

実家のある渋谷近くまでくると、順子が声をかけた。

「ここはね、うちがツケで買える所だから。」

というなり、出てきた店員とは顔なじみなのか、挨拶しながら、

「満タンにしてね。それから林のツケに廻しといてね。」

燃料タンクが一杯になると、何だか気持まで豊かになる。

「ねえ、川島からまきあげた金で、何か食ってゆこうよ。」

「そうね。いくらあるの。三百円ちょっと。だったら、そば屋の親子という所ね。でもいいわ。」

順子は実家の玄関を開けるなり、

「タダイマア。」

と声をはりあげた。そして奥から母の貞子が出てくるなり、

「あたしたち、しばらくここに泊るわ。アパートがあかないのよ。今晚ごちそうしてね。彼はステーキが好きなのよ。」

と一息に言った。

「それは、うちはいつまでいても構わないけれど、お客様用の寝室だと、机もないし、あなたはともかく、鉄平さん勉強もできないんじゃないかしら。」

「いいわよ。あたしの部屋を使うから。」

「あたしの部屋といたって、あそこはもう啓子がいすよ。元の啓子の部屋には守がいるし、守の部屋は納戸ということで、家中の古筆筒やいらないテーブル、陶器の類運びこんじゃったし。」

「しばらくの間だから、啓子と守が同じ部屋で暮しやいいのよ。」

順子はそういうなり、トランクを拾いあげると、二階に上っていった。鉄平が貞子に挨拶をし、事情を説明して二階に上ると、順子が妹の啓子と部屋の入口で言い争っている所だった。

「お姉さま、いくら何だって勝手よ。」

「元々、これは私の部屋でしょ。」

「元はそうでも、今はあたしのよ。」

「だから、あたしたちも、この部屋で二人一部屋でガマンするんだから、あなたも守と二人一部屋でガマンしなさい。」

「お客さま用の部屋は？」

「ダメ。あそこは、机がないでしょ。本棚がないでしょう。鉄平さんは勉強しなくちゃならないのよ。」

「あたしだって同じよ。」

「そんなことを言うなら、あたしもよ。あんたみたいの学部三年とか、守みたいな中学生とはちがって、鉄平さんもあたしも、大学院のドクターコースよ。でも、あたしはいいの。鉄平さんというのは、あなたから見てお客さまでしょう。お客さまに、一番いい勉強部屋を提供するの

が、主人側の礼儀じゃないかしら。」

「それならいいわ。お姉さまはどうでもいいんでしよう。お姉さま、守の部屋にいらっしやいよ。鉄平さんだけなら、お客さまだからあたしの部屋に泊めてあげる。」

順子は一瞬、グッとおしだまった。やがて今までとは打って変った冷静な声で、
「そう。じゃ、お願いするわ。」

啓子も今となつては後にひけなくなったようだった。

「はい、はい。できるだけサービスいたします。」

そういうなり、鼻歌をうたいながら、階段をおりて行つた。

「おい、おい、困るよ。オレの家じゃないから今まで黙っていたけれど、嫁入り前の娘と同じ部屋になんか泊れないよ。」

「しょうがないわよ。行きがかり上、あんなったんだわ。あれで引っこんだりしたら、姉の立場として、第一、あたしの顔が立たない。」

「マイ・フェイス・ダズント・スタンドか。それにしてもなあ。」

「だからね。今晚寝る前にね、裸になって体操でもしてよ。啓子がキャー、と言いつつなくらい。」

「それくらい、お安い御用だけれどね。」

「いいからさ、この部屋で偉そうな顔しててよ。あなたはこの家の長姉の旦那さまなんだから、大きな顔をする権利があるのよ。」

鉄平は仕方がないから、言われるままに、部屋に大の字に横になった。若い娘の部屋には、彼が悩ましくなるようなにおいがこもっている。それが順子の物か啓子のものかわからなかったが、彼にしてみれば同じことだった。そしてこの部屋で啓子と二人切りで眠るといふことは、考えるだけで危険なこと——たとえばブレーキのない車で高速道路をとばすくらい危険なこと——のように思われた。

廊下に足音がして、襖をガタガタとノックしたと思うと、啓子がお手伝いの君子と一しょにはいつてきた。二人で布団類をかかえている。鉄平は順子からあんなに言われていたのに、とび起きると、かしこまって正座した。

「母から聞きましたが、昨夜はテントの中でろくに、お休みになれなかったんですってね。」

二人はそのまま、床をとりはじめた。

「いや、いや、僕は今は眠くありませんから。」

鉄平はあわてて部屋をとび出した。あるいは床をとりはじめたのは、彼を追いつ出すための、啓子の策謀であつたかもしれない。夕食の時に、鉄平が啓子の部屋に泊る、ということを知ると、貞子が血相を変えた。

「バカなことを言いなさい。啓子も啓子だけれど、順子も何です。旦那さまを妹に預けるなんて。啓子、お部屋を空けて、守と一緒に寝なさい。」

啓子も順子もふくれ面をしていたが、母親に言われて、やむを得ずそうするという形になれば、姉と妹の顔は立つのであるらしい。実は二人とも、鉄平を啓子の部屋に寝かすことについて